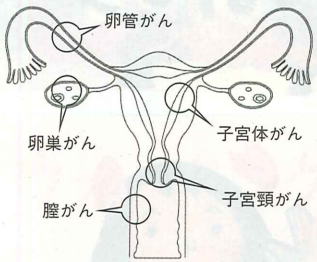
子宮頸（けい）がんは予防できる！？

女性特有の“がん”には、乳がん、子宮がん、卵巣がんなどがあります。子宮がんには、子宮の出入口にあたる頸部にできる子宮頸がんと奥のほうにできる子宮体がんの２種類があります(図１)。

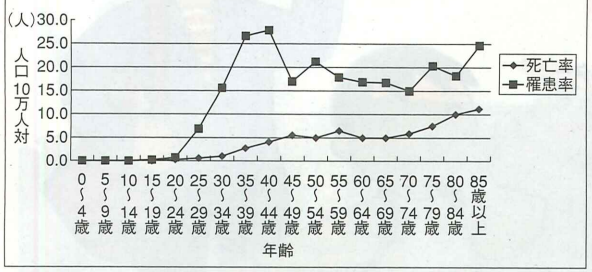
このうち子宮頸がんは、(図２)にあるように20代後半から罹患率が急激に増加し40歳前後でピークに達していて、妊娠や出産を望む世代にも発生していることがわかります。また、妊娠を望まない人でも、その後の生活に支障をきたす可能性や、進行がんでは生命そのものにたいしても重大な影響をあたえることがあります。子宮頸がんは、全女性のがん死亡原因の第３位であり、特に20代、30代ではすべてのがんの中で第1位をしめています。

図1.女性性器がん



子宮頸がんの症状としては不正性器出血や帯下の増加などがありますが、罹患した人の半数はまったく症状がなく、検診で初めてわかりました。治療には手術、放射線、抗がん剤がありますが、進行したものでは効果が限られます。がん検診を定期的に受けていれば、がんになる前の状態や早期がんの段階で発見できます。手術もごく限られた範囲ですみ、子宮を失わずにすむこともあります。しかし、進行したものでは子宮だけでなく、その周りの臓器も一緒に摘出しなければならず、手術後もさまざまな後遺症がでる可能性があります。手術できないほど進行したものや、手術が不完全であった場合は放射線や抗がん剤治療を行いますが、副作用も強くつらいものになります。

図2.子宮頸がんの罹患率と死亡率



近年子宮頸がんの原因が解明され、今後予防できる可能性がでてきました。昔から修道女は子宮頸がんにかからないことがわかっていました。すなわち性交体験のない女性には頸がんは発生しないということで、性交がなんらかの発症因子と関連していることが推測されていました。

最近の研究で、子宮頸がんの原因はほぼ100%ヒトパピローマウイルス(HPV)であることがわかりました。HPVはごくありふれたもので、皮膚や粘膜に“いぼ”をつくるウイルスです。HPVには100種類以上の型があり、発見された順に番号が決められています。その中の一部が発がん性ウイルスまたは高リスクウイルスといわれ、16型、18型、31型など15種類ほどあります。この高リスクウイルスも特別なものではなく、性交経験のある女性の80%以上が感染するといわれています。しかし幸いなことに感染しても90%以上は自然に体外に排出されます。ごく一部の人では子宮頸部粘膜にウイルスが留まり(持続感染)、数年から数十年かけて頸がんになります。持続感染が起こってもその後ウイルスが排出されることもあり、高リスクウイルスに感染しても子宮頸がんになる可能性は0.15%と推定されています。この子宮頸がん発がんウイルスの発見により、ドイツのハラルド・ツア・ハウゼン博士に2008年のノーベル生理学医学賞が授与されました。

子宮頸がんの原因がHPVであることがわかったので、予防に向けたワクチン開発が進められました。ウイルスや細菌など自己にとって好ましくないものが体内に入ってくると、それを攻撃する物質(抗体)ができます。その抗体をあらかじめ用意しておけば、ウイルスなどが侵入してきた時にいち早く攻撃して感染を防ぐことができます。この抗体を作るために用いるのがワクチンです。麻疹・風疹ワクチン、インフルエンザワクチンなどいろいろなワクチンがあります。高リスクHPVに対するワクチンもすでに開発されており、世界100カ国以上で使用されています。日本でもやっと2009年12月に一種類のワクチンが使用できるようになりました。近日中にもう一種類が使用可能になる予定です。このワクチンはすでに感染しているHPVを取り除くことはできず、また発生しているがんを消す作用もないので、HPVに感染する前に接種する必要があります。すなわち、性行動が起こる前の小学生から中学生の女児に使用するのが効果的です。しかし、性交体験のある女性でも新たな感染を防ぐ意味での効果が期待されています。このワクチンを作る時には、ウイルスの殻の部分だけを使用しています。中身である遺伝子は含まれていませんので、ワクチンによってHPVに感染することはありません。

現在使用可能な子宮頸がん予防ワクチンは、一回の接種では十分な抗体ができないため三回の接種が必要です。初回、一カ月後、六カ月後に接種します。副作用は注射部位の腫れや発赤、痛みなどがありますが、他のワクチンとの差はありません。ワクチン接種費用ですが自費になるため医療機関によって異なります。一回2万円程度のところが多いようです。ヨーロッパやオーストラリアなどでは全額公費(無料)で接種できるところも多く、日本でもそのようになって欲しいものです。

このように、子宮頸がんは予防できる可能性ができてきましたが検診の重要性が薄れるわけではありません。ワクチンで予防できるのは15種類ほどある高リスクウイルスのなかで２種類のみです。これで70%以上の予防効果はありますが、他の型のHPVには効果がありません。HPVはありふれたウイルスであり、どんな人でも感染している可能性があります。定期的に子宮がん検診を受け、自分自身の身体を守るように心がけてください。

(社)吹田市医師会　御前　治